



昨年12月以降、米国トランプ大統領によるエルサレムへの大使館移転の宣言、また国連パレスチナ難民救済機関（UNRWA）への米国拠出金の大幅減額に見られるように、パレスチナを巡る状況は悪化し、人々の生活がますます困難になることが心配されています。またガザでの電力事情も悪化し、病院の閉鎖などの事態も起こっています。暗いニュースばかりが続いていますが、今号ではそんな中でも力強く生きているガザの人たちを紹介します。

脚を失っても人生をあきらめない

2014年の戦争によって障がいを負った人たちへの、ガザでのリハビリ支援は3年目を終え、これまで約800人の患者さん（主に、負傷時未成年だった人たち）を支援してきました。リハビリの結果、半数以上の人たちが自分で立てるようになったり、歩けるようになったり、学校に復学したりしています。しかし四肢の切断や脊椎の損傷、脳の損傷などにより重い障がいを負った人たちもかなりいて、現在もリハビリ支援は続けられています。こうした若い人たちは、どのように生きているのでしょうか。

車椅子バスケットに挑戦する

ガザの南部ラファに住むアベッドさんは、2014年夏の戦争時は大学生でした。避難先でイスラエル軍のロケット弾を被弾。ロケット弾が足の近くで爆発したため、九死に一生を得たものの右足を膝上から切断せざるを得ず、左足も大きな傷が残りました。切断手術はガザの病院で行われましたが、当時は非常に多くの患者がいて十分な治療が行えなかったため傷口が悪化し、治療のためドイツに渡航することになりました。

出国許可を取るのに時間がかかってたどり着いたドイツには、2か月間滞在して再手術を行い、義足を装着するようになりました。その後ガザに戻り当会のリハビリを開始してからは、足の可動域が広がり両足の筋力もついてきました。一時は義足を付けての歩行もバランスが取れるようになりましたが、ドイツから持ち帰った義足はサイズが小さくなりすぎたため、現在は義足ではなく肘置きのある松葉づえを使用しています。ガザでは以前の義足に代わる良い義足が入手できないためです。残った左足にも収縮が見られ、「短下肢装具」を装

着しています。

アベッドの家を訪問すると、松葉杖を器用に使って階段を上り下りしていることが分かりました。現在は大学に戻り、情報システムを勉強していてあと半年で卒業予定です。驚いたことに、子ども向けの小さなゲームショップを開いていました。赤十字国際委員会に事業の申請をして資金協力を得たのです。パソコンが数台並んだ駄菓子屋のようなショップからの収入で、戦争で壊された家の再建費用を一部ねん出しているそうです。

戦争前はサッカー少年だったというアベッドに近くの体育館に誘われました。車椅子バスケットボールに出会って、いま熱中しているのだそうです。車椅子を器用に使って、離れた場所からシュートを見せてくれました。

「戦争前はサッカーをやっていましたが、負傷後はスポーツから遠ざかっていました。2年前に出会ってから、バスケットボールをすると自分が意欲的になることに気づきました。最初は地元チームに参加していましたが、練習して自信がついたところで、ガザ地区で一番強いクラブに参加することが

できました。新しいチームに移籍してから、海外のプロチームの選手になるという決意は固くなりました。」

明るく、冗談を交えながらリハビリを受けるアベッドからは、周りの人たちが元気をもらっています。その明るさは家族や周囲の厚いサポートによるものです。ドイツで



治療している間は、ドイツ在住の叔父さんがずっとサポートして、勇気をもって生きる大切さを教えてくれたそうです。ガザに戻った後も家族が笑顔でポジティブに献身的にサポートをしたことが、現在の状況に繋がっているのだらうと思いました。

理学療法士のアフメドとの関係もキーです。リハビリでは両足の筋力を鍛えることを中心に、歩行訓練や負傷箇所のマッサージも続けています。以前、アベッドは別の

理学療法士には心を開くことができず、リハビリを拒否したこともありましたが、「アフメドが励まし続けてくれるおかげで、リハビリを継続する自信になっています。」とアベッドは言います。アフメドも「アベッドはリハビリにも積極的です。リハビリでの信頼関係が目標である『1人で日常生活を行えるようになる』の達成への一助となっています」と答えました。アベッドがプロ選手になる日も夢ではないでしょう。

家族の支援が大きい

他のリハビリの患者さんたちの様子も簡単に紹介しましょう。

サファさん(25歳)は、北部のベイト・ハヌーンにすむ4児のお母さんです。2014年に自宅で爆撃にあい右上腕の神経が損傷し、左脚も膝下から切断しました。神経損傷によって右腕の筋力が低下し日常の動作がほとんどできなくなりました。医療チームは、筋力回復と筋萎縮の予防を目標にリハビリを始めました。右の肩と肘は問題なく動くようになり、娘たちに服を着せたり、髪をとかしてあげられるようになりました。今でははさみを使うこともできます。

現在は日常動作のリハビリに取り組んでおり、掃除や皿洗いなど、家事を両手で行うように挑戦しています。サファはとても心の強い人だと、医療チームは話してくれま



したが、その理由の一つは、常にそばで妻を気遣う夫の存在だと思いました。

現在7歳になったアミンくんは、2014年の戦争時、家族と一緒に避難しようとして家の外に出たときに爆撃にあい負傷しました。腰骨が損傷し、下肢に弛緩性の麻痺が残って動けなくなり、日常の動作のすべてを父親に頼るようになっていました。リハビリを受け始めたことで腕の筋力が上がり、家族の助けをかりながら、膝立ちができるようになりました。今では自分で車いすに乗り、自分の腕で動かして一人で学校に行くことができるようになりました。他の子どもたちのように遊んだり、走り回ったりできないことでイラつき、攻撃的になることも多かったのですが、現在では怪我をする前と同じように友達と一緒に遊べるようにもなりました。小さな妹もアミンのリハビリを手伝っています。



ガザでは、2014年のイスラエル軍の侵攻によって、数千人が大きな負傷をし、障がいを負ったと言われます。パレスチナの将来をパレスチナ人たちが決めることが難しい状況の中で、人生だけでも自分の意志で切り開こうとする人たちの姿に、私たちの方が元気をもらっているように思えます。(エルサレム事務所)